書評

時枝誠記博士著「国語学原論　続篇」

阪倉篤義

本書の正篇「国語学原論」が刊行されたのは、昭和十六年の末であった。入営を旬日の後に控へたあわたゞしさの中で、恐らくはこれが最後の読書になることを覚悟しながらあの書物を読み終へた時の交々の感慨を、今なほ鮮かに想ひ起すことができる。無論それまで、学生時代から、京城大学の時枝教授の論文に接する機会は、決して少くはなかったし、「国語学史」もその前年に既に刊行されてゐた。たゞしかし、言語過程説と称する、氏の特異な言語本質観に基いて、果して一貫した国語学の体系が立て得られるものかどうかといふ点にはなほ、期待をまじへた不安の念の去り難いものがあったのは事実であった。その時に当って「国語学原論」は、文法論を中心として、その期待に見事に答へるものであったのである。「従来の構成主義的言語学の諸部門が、言語過程観に従って、如何に根本的に改められねばならないかを明かにする為に、具体的な国語現象に直面しつつ、これを新しい体系に組織することを試みた」といふ序文のことばには、必ずしも無稽の揚言とはなし得ないものが含まれてゐることを思はせられた。あの書物の成立を見て、われわれは言語過程説なるものを改めて認識し、そして新しい視野の展開を予想して胸躍らせることができたのである。

しかしながら、博士にとって、この「原論」正篇は、その後の研究の基礎工作に過ぎなかったやうである。「如何なる問題を捉へ、如何なる領域を展開し、そして国語の全貌を学問的体系の下に如何に描き出すかといふことは、全く今後に残された問題である」とは、その後六年、終戦のすぐ後（二十三年）に刊行された「国語研究法」に披瀝された抱負であったが、今回の続篇に至っては、更にかう述べられてゐる。

「（正篇の）第二篇の各論は、当然、「正篇」の総論の展開したものであるべき筈であるが、実は、この各論の組織は、在来の言語学、国語学の諸部門をそのまま踏襲したに過ぎないものであって、そこにはまだ言語過程説独自の体系といふものは、打出されてゐなかつた。従って、各論は、総論を承けるものとしては、甚だちぐはぐなものとなってしまったのである」。ここにこの続篇が書かれなければならなかった重要な動機が存するといふのであり、従ってこの続篇において、はじめて、言語過程説に基く国語学の体系は正しく展開されてゐるものと見るべく、今後の言語過程説批判は、ごこに説かれてゐるやうな点に基いてなされなければならないといふことになるのであらう。

ところで、少しく意外なことに、今この続篇を読み終へての全体的な印象は、かって正篇に接した際に与へられた感銘に比べると、むしろやや稀薄なやうに感じられる。われわれは、この書物においては、もはや正篇における時ほど、論の特異さによる驚きを経験しはしないのである。これは一つには、早く言語過程説のよってゐた機

能主義的な立場といふものが、もはや現在では国語学界に、かなり一般的な考へ方になってしまってゐるといふことにもよるのであらう。「正篇」から「続篇」への十四年間は、終戦を間にはさんで、学界にとってもまた大きな変動の時期であったことを、改めて想ひ起させられるのである。が、又一つには、右のやうな「続篇」の議論の穏やかさといふものが、実は、言語過程説の側から現在の一般的な議論の方へ歩みよることによって生れて来た面のあることをも指摘できるのではあるまいか。言語過程説に対する批判はこれまで数多く現はれたがその中心をなすものは、この理論が個人心理学的であり、言語の社会性についての考慮を欠いてゐるといふ点に関する非難であった。「続篇」は、かなり意識的に、この批判に答へようとされた点が窺はれる。言語の社会性といふ問題は、言語過程説からでも、かういふ風に説明できる。といふところから、更に進んで、そのやうな言語の社会性を正しく論じ得るところにこそ、この理論の特質はあるとまで主張されるに至ってゐるのがこの続篇である、と見るのは誤りであらうか。

今、この書物の内容を簡単に要約するならば、まず「第一篇 総論」において、言語を人間的事実との関連において考へようとする、この「続篇」の立場を述べて、言語＝言語行為＝言語活動＝言語生活なる等式の成り立つ所以を説明し、ついで「第二篇 各論」に入って、その「第一章」には言語の最も具体的な事実としての伝達について説き、「第二章」には、そこから言語と生活との機能的関係を論じて、言語に実用的・社交的・鑑賞的の三機能を認め、ついで「第三章」には、言語において文学を考へようとする立場を明かにして、文学の社会性に及び、「第四章」では、再び第二章との関連において、言語といふ生活が、他の諸生活と如何に関係するかを見、「第五章」には、言語の、社会的関係（人と人との間の関係）を構成する機能を改めて強調する。最後に「第六章」は目を通時的な方面に向けて、言語史を言語生活史として把握することの必要を説くのである。これによっても窺はれる通り、本書においては要するに言語における伝達といふ問題が甚だ強調されてをり、それが以下の論の基礎になってゐる。これは「正篇」においては比較的軽く扱はれてゐた問題のやうである。例へば「続篇」二八頁に掲げられた伝達図は、「正篇」九一頁に掲げられた言語過程図を「簡易化して」掲げたものの由である（二七頁）けれども、「正篇」のその図は、話者及び聴者の、第一次から第三次乃至第四次に至る遂行過程・受容過程が甚だ詳しく示されてゐて、表現（及びその逆としての理解）の過程といふものが、それぞれ個別的にまで問題にされてゐる観が深かった。（そこに個人心理学的といふ批判の生じる余地もあった訳であらう）。それに対して、「続篇」の図は、右の話者・聴者の内部的な過程の段階を示すやうなことは総て省略し、その代りに、全体を伝達として括って、両者を相互関係において扱ふことを示さうとしてゐる。この図の「簡易化」のしかたそのものにも、「正篇」から「続篇」の推移のあとを窺ふことは可能なやうな思ひがするのである。そして、このやうな図によって示されるところはもはや例へばブルームフィールドが「言語」第二章に説いてゐるところなどと、かなりに相似なものになってしまってゐるのではあるまいか。

表現主体・理解主体の内的な心的過程そのものに言語の本質を見ようとするものであるが故に、主体的言語観とも呼ばれるこの学説にあっても、伝達の事実を問題にする以上は、おのづから、その主体性に制約を加へる何ものかの存在を予定せざるを得なくなる道理であらう。本来「通じないものである」筈の言語（二八頁）が、伝達の用を果すために先づ必要とされるのは「如何に相手に理解させるかの技術でなければならない」（六一頁）とするならば、そのやうな技術を技術として有効であらしめるための基本的な条件となるべきものの存在が、必然的に認められなければならないことにならう。しかもまた、逆に、この点を重視する立場から「表現」の事実を問題にするとすれば、それは正に、まづかうした共通性といふ制約を予想しつつも、なほ、如何にしてその中に個性的なものを打出して行くかの真剣な努力でなければならない。実用的なことばと、文学のことばとの関係は、やはりかうした点から観察されるべきもののやうに思はれる。

本書各論の第三章には、文学は本質的に言語そのものであり、両者は連続的に眺められなければならぬ、との意見が強調されてゐる。「文学と言語とは、それが表現であることにおいて、これを連続的なものと見なければならない」（一〇四頁）との考へ方は、肯定できよう。そしてまた文学における言語の関係を、絵画彫刻における絵具や木材石材の関係に類推して考へるべきではなく、またそこに文学の、他の芸術に対する特異性を認めることができるとする議論も尤であらう。ところで、「文学は言語である」とすることはよい。しかし逆に「言語は必ずしも文学ではない」、といふ点に関しての説明は今一つ不足してゐるやうに思はれる。文学と言語との関係を、芸術的な建築や調度と、日常的なそれとの関係に比して「ただ、我々は前者において、快と喜びとを感じ、後者において、それが少いといふだけの相違である」（一〇四頁）と言はれるところにも窺はれるやうに、文学を日常の言語表現から質的に分つものは認められないやうな口振りである一方、また「議会の財政演説でも、教会の説教でも、自然科学の論文でも、それらの言語の持つ実用的機能以外に、その表現が、我々の鑑賞に堪へるものである場合には、これを文学と呼んで差支へないわけである。ただ、それらの場合には、それらの実用的機能が果されると同時に、表現の意義も失はれるところから、我々は、これを文学と呼ばないだけの相違があるに過ぎないのである」（一二〇頁）といふ言葉の後半、傍点を施した辺りから推察すれば、日常の言語が、伝達といふ実用的機能に終始するに対して別に、いはば表現のための表現といふ意義を有するものとして、文学の言語を考へられてゐるやうでもある。しかも前のところで、「鑑賞性といふことは実用性の否定において成立するものでない」といふことは言語においてもそのまま当はまることが述べられてゐるのである。

一体、文学を、言語の表現において理解しようとするだけならば、いはゆる訓詁学派の早くから唱へるところであって、今更目新しいことではない。本書において特に強調されるのは、「言語の成立は、表現が理解される過程にあるのであるから、文学の芸術性は、理解の体験の中に求められなければならぬ」（一一五頁）といふ一点であらう。しかしながらこのことは、しからば文学は読者に体験されなければ存在せず

また例へば源氏物語の文学は、その読者の数だけ違った形で存在するといふことになるのか、といふ屁理窟を述べたてる余地を残すものではなからうか。勿論、読者は極力、作者の伝達しようとするところを理解せんと努めるのであり、従ってそこにはおのづから平均値が現はれるといふことになる訳であらうが、それならば、はじめから表現の問題としてこれを考へるのと、結果的には同じことになる道理であらう。ここにもまた、余りにも伝達といふ実用的機能に即して文学を説かうとされすぎた嫌ひがあるのではなからうか。文学史を専ら「読む」歴史として記述する(二三一頁)ことにもやはりなほ問題が残るであらう。「言語は一般に思想内容の伝達を目的とするものであるといはれる。思想内容の伝達といふことは、要するに生活目的の達成を目的とするものであるといひ得る。ところが言語が表現活動である以上、それは表現としての完成を期すのは当然である。ここに言語が実用的所産である一面、芸術的所産となり得る可能性を持つこととなる」(国語研究法)といふ表現を中心にした考へ方に、文学特に詩の言語などを考慮した場合、私はやはり、より強い共感を懐くことができる気がする。

各論の第三章まで、全体の約半分を問題にしてゐる間に、与へられた紙数はもはや尽きてしまった。しかし問題とすべき点は実は、主として以上の前半にあるのであって、以下四・五・六章に述べられたところは、何れも具体的な問題に触れつつ、その処理方法に根本的な反省を促すべき貴重な文字である。例へば第五章の「対人関係を構成する辞の機能」の論は、昭和二十六年に誌上に発表されて以来、これに示唆されて、既に数篇の優れた論考が生れる契機をなしたものであるし、また第六章に説かれる如く、言語生活史としての国語史を考へようとする機運は、今や澎湃として起りつつあること周知の通りである。文献を資料として見ず、研究対象として考へようとする立場の重要さは、正にここに説かれる通りであらうと思はれる。ただ言語生活史なるものを意図するに当って、一時代一個人の言語生活の体系の全体的把握がまづ必要とされるけれども(一九六頁)、これは言ふべくして、実行にはなかなかの困難を伴ふであらうことを覚悟しなければならない。しかし、とにかくここに今後開拓されるべき興味深い分野の存することは疑へない事実であらう。本書において、最も読みごたへのある部分は、やはりこの後半、四・五・六の三章であると思はれる。(ついでながら、二一九頁の樹幹図式と河川図式は、左右入違ってゐるやうに思はれるが、如何であらう)。誤解に基く無用の言辞を弄した点がありとすれば、著者並に読者に対して、お詫び申しあげる。(東京都神田一ツ橋 岩波書店 昭和三十年六月発行 A5 二四〇頁 四〇〇円)

—京都大学助教授—